

他の人のために自分の時間を使う



東日本大震災ボランティアに取り組んで

埼玉県立越谷北高校 関原 正裕

はじめに

8月6・7日、越谷北高の3年生20人を連れて仙台へ震災のボランティアに行ってきました。一泊といっても、貸し切りバスで夜に埼玉を出て夜明け前に仙台に到着、少し仮眠した後現地に入るという行程での活動でした。

越谷北高校は過熱ぎみの「進学校」で、夏休みとなればほとんど全期間「講習」が開設され、3年生は毎日のように登校しています。「夏は1日10時間勉強」というスローガンめいた言葉が生徒たちを覆っています。こんな学校で「受験生」をボランティアに連れて行くというのは、それなりに「勇気」がいるし、実際「何で今の時期学校が…」という「反発」があったことも事実です。

他の人のために 自分の時間を使う

私はいつも「受験勉強は自分のためにすること、自分のためだけに自分の時間を使うこと」であるとクラスの生徒に言っています。つまり受験勉強はある意味で自己中心的な時間の使い方だということです。一旦社会に入り仕事をして生

きていくうえでは、これだけではこまることが多いと思っています。みんなが「自分のためだけに時間を使う」ような仕事の仕方、生き方をしていたら会社も組織も社会もうまくいかないと思います。他人のためにどれだけ自分の時間を使うか、他人のために自分の時間を使える人間の集団になってこそ組織や社会はうまく転がり、弾んでいくのだらうと思っています。

こんな話を生徒にしている中で、夏休みは受験勉強ばかりじゃなくて少しは震災のボランティア活動くらいしたらどうだ、行くなら連れていくよと話をしたわけです。すると翌日ある女子が「ボランティアいつ行くんですか」と聞いてきたのです。正直言つてちょっとびっくりすると同時に「うちの生徒も捨てたもんじゃないな」と見直しました。こういう生徒の気持ちを育てることこそ教員の役目ではないのか、そんな気持ちがメラメラと炎のように高まり、今回のボランティア活動をするようになったのです。

40人で畑のゴミ取り

今回私たちがボランティア活動に入つた場所は、仙台市宮城野区にある「仙台

市津波災害ボランティアセンター」から南へ、宮城野区から若林区に入ったあたり、海岸から約2・3キロのある農家の方の畑でした。はるか遠くに、所々櫛が欠けたような浜辺の松並木が見え、その付近が海岸線で、そこからは相当の距離があるこの場所にも2メートルを超える津波が押し寄せたそうです。

畑は、津波によつて様々な瓦礫に覆われたのですが、トラクターによつて大きなものはおおよそ撤去されたそうです。でも機械では取りきれない小さな石、ガラス、木くず、草の根などは人の手によらなければ取れず、まだ畑の土の中に残っています。また、土のなかには塩分も残っていて、かすかにしょっぱい臭いが漂っていました。私たち越谷北高校の21人は他の一般のボランティアの方たちと合わせて40人で、熊手で土を掘り返し、人海戦術で土の中からそういった細かいものを取り出し袋詰めしていきました。かなり気温が高く、炎天下だったため、30分程度作業してはすぐに休みを取り水分補給するという形で作業をすすめました。遠く埼玉から夜行バスで来た私たちにとっては「もう少しやらせてよ」という気持ちにもなりました。午後になって

雷がどよめき始め、雨もぼつぽつ来たため、予定より1時間程早く1時半すぎには作業を終了せざるをえませんでした。

ほんの数時間の活動でしたが、休憩時には地元のボランティアの方々とおしゃべりしながらアイスを食べたり、昼食時にはキュウリの漬物をいただいたりと本当に楽しく活動することができました。

また、若い高校生が20人も埼玉からやってきたということで、地元の方々を多少なりとも元気づけられたかなとも思います。もつと時間があれば、震災の時のこと、今の生活のこと、私たちの今できることなど、話し合い交流を深めることができたと思います。それが十分にできなかったのがちよつと残念でした。

若林区の被災状況をこの目で見て

作業終了後に、高校生が来てくれたというところでボランティアセンターの特別のはからいで若林区の最も被害の激しかった場所をバスで廻っていただきました。コンクリートの家の土台だけが残り、そっくり家がなくなっている地域、一階部分が空洞状態の特別養護老人ホーム、現在は学校ごと避難に使われていない荒

浜小学校、ぐしゃぐしゃになった車が3台4台と重ねられ数十メートルと続く巨大な廃車の塊、津波の猛烈な威力を目の当たりにして改めて今回の震災の被害の深刻さに息をのみました。

瓦礫はある程度まとめられてあちこちにかためられていました。壊れた家も中の整理が済んでいるのか、人が作業している様子はなく、解体を待っているといった状態でした。若林区は全体としてある程度の「復旧」というか、被災の整理がすすんでいたようにも見えました。大都市の近郊なので、重機も投入しやすく、ボランティアの人も集まりやすいためなのでしょう。

この地域は仙台市から比較的近かったせいか、大震災当初、被災の状況が比較的詳しく報道された地域のように思います。震災の翌12日『毎日』朝刊に「仙台市若林区荒浜で200〜300人の水死体が見つかった。」との報道があり、この日の夕刊の一面には宮城野区蒲生地区の惨憺たる被災状況がカラー写真で報じられています。また8面には若林区荒井で被災者を救出する自衛隊員を写したカラー写真も載っています。日を追うにつれて、石巻や南三陸、気仙沼さらに岩手

県の陸前高田や北方の宮古などの地域の深刻な被災状況が報じられてくると、仙台市近郊のこの地域のことはしだいに取り上げられなくなってきたように思います。しかし、震災の被害は他の地域と同様に深刻でした。

生徒は何かをしたいと思ってる

参加者の大部分は今私が担任をしている、元担任の気心の知れた生徒ばかりで、本当に気負うことなく自然に自分から参加してくれました。現地でも地元ボランティアの方と楽しくおしゃべりしながら明るく作業に汗を流していました。

生徒たちが寄せてくれた感想を見ると、彼らが震災以来自分でも何かしたいとずっと思っていたことが分かります。「僕は3月11日の大震災から今まで、テレビで被災地の大変な現状を見てきて、少しでも力になりたいと思っていました。そこに今回のボランティアの話があり、迷うことなく参加させていただきました。」「3月11日から、被災地の役に立つことを何かしたいと思っていた私に

とって、今回のボランティアはとてもいい経験になりました。」と書いています。受験勉強漬けにされている高校生であっても、今回の大震災は若者たちの「何かをしたい」という素直な心をゆさぶるものがあつたのでしょうか。

活動を終えてある生徒は「今回のボランティアでは、たくさんのことを学びました。現地の方々の温かい気持ちや、復興に向けての力強い意志、自分は何かをやり遂げようとする意志が弱かったけれど、電気水道食べ物衣服など、全てに恵まれている自分の環境はありがたいことだと強く思い、もっと自分のやるべきことを頑張りたいと思いました。」また、ある生徒は「受験勉強とは違って本当に大切な勉強ができたと思います。」とも書いています。県教委や校長の許可、保護者の承諾、旅行者との連絡等正直言って準備のためには手間暇はかかりましたが、教師としてまさに「やりがいのある」ボランティア活動だったと感じています。

参加生徒の感想から

大切な勉強

とても貴重な体験ができて、受験勉強

強とは違って本当に大切な勉強ができたと思います。他のボランティアの方々も親切で楽しく作業できたので、夏のいい思い出になりました。

誰かのために役に立てた

ボランティアの内容が泥かきだと思っていたので、正直なところ少し拍子抜けした部分はあったけど、この活動で誰かの役に立てたのであれば良かったと思います。ボランティア活動が終わった後に被災した悲惨な状況を見られたのは貴重な経験になったので良かったです。

勉強で学べないことを

今回の活動では本当に貴重な体験をすることができました。

現地に行く前はテレビでみる被災地はテレビの中での出来事で自分には遠いことと思っていました。でも実際に現地にいったら被災地の状況を自分の目で直にみると自分の近くでもこんなひどい災害が起きてしまう。という恐怖と被災したみなさんの事を思うとなんとも言えない気持ちになりました。そのなかで少しずつ元の生活に戻りつつ生活している人々をみて本当の強さを学んだ気がします。

改めて自分たちができることを真剣に考え直そうと思いました。

また他のボランティアの方々にも、体調面や活動内容などいろいろな気にかけてくださり、とても親切にしてください、活動しやすく、ありがたい気持ちでいっぱいです。

いま受験勉強のなか勉強ばかりでなく、また勉強では学べないことを多く学ぶことができました。今後この経験で学び、何より感じとったことを一生忘れずに、これからも被災地のみなさんのために自分にできることを少しでもやっていきたいと思っています。

絶対に復興できると

被災地ではまだ壊れた家や、家の土台がたぐさんあり、瓦礫や倒木の山もありました。

以前、田んぼだったところはガラスや瓦が混じり、草が一面に生えてしまっていました。その様なところが見渡す限りありました。田んぼに普通にお米が育つようになるにはどれだけの労働力と時間が必要なのだろうと考えました。長期的な支援が必要だと感じました。

しかし、少し内陸では「再開店」や「復

活」という文字もみられました。ボランティアセンターでは物と人の移動がとてもスムーズに行われ、みんなが復興に向けて明るく、協力して頑張っていました。被災者の方も、どんどん復興してきているから大丈夫とおっしゃっていました。まだ時間はかかるかもしれないけれど、絶対に復興できると感じ、安心しました。何年か後に仙台の綺麗な海と田園を見に行きたいです。

今までにない経験

ボランティアでは主に民家の草抜きをしました。海岸から2キロぐらいのところなのに、津波の被害で田んぼがだめになってしまつて、周りが雑草だらけでことの深刻さを改めて実感しました。

最後にバスで海岸の方へ行っていたが、家の下の土台しかない家がたくさんあったり1階がつつぬけで何もない老人ホームがあったり車が潰れていたり、テレビでは見ていましたが、初めて肉眼で見えるものばかりでした。とても貴重な体験ができたと思います。

一緒にボランティアをした方々は優しくとてもよくしてもらいました。

明るくボランティアができたと思います。関原先生も引率ありがとうございました。今までにない貴重な時間を過ごすことができました。

迷うことなく参加

僕は3月11日の大震災から今まで、テレビで被災地の大変な現状を見てきて、少しでも力になりたいと思っていました。そこに今回のボランティアの話があり、迷うことなく参加させていただきました。

ボランティアの内容は、畑に津波で流されてきた様々な物を拾う作業でした。鉄やガラスや木材など、津波で流されてきた畑にはふさわしくない物がたくさんありました。炎天下の中での作業でしたが、まったく辛いとは思いませんでした。雷のために作業が早く終わってしまったことに、もうちょつとやってみたい！と、少し残念な気持ちもありました。

ボランティアの場所は沿岸から3kmほど離れていたにも関わらず、波の跡が残っていた高さは自分の身長よりもはるかに高く、信じられなかったです。

作業が終わった後、津波の被害がひどかった沿岸の方をバスで回って見せ

ていただいたけれど、言葉になりませんでした。家は跡形もなく流されていて、残っていた家もかなりひどく壊されていて、あちこちに瓦礫の山があつて、津波の恐ろしさを実感しました。何度もメディアを通して被災地の写真や映像を見てきたけれど、実際に現地です、生の現状を目にして、涙が出てきそうでした。

しかし、ボランティアをやっていた現地の方々は温かく接してくださって、お話はとっても楽しくて、笑顔で作業をすることが出来ました。今回のボランティアでは、たくさんの方のことを学びました。現地の方々の温かい気持ちや、復興に向けての力強い意志、自分は何かをやり遂げようとする意志が弱かったけれど、電気水道食べ物衣服など、全てに恵まれている自分の環境はありがたいことだと強く思い、もっと自分のやるべきことを頑張りたいと思いました。また被災地の目にした現状は、これから先忘れることなく、節電など自分が出れることを見つけて、やっていきたいです！

たった数時間の作業で、どれだけ力になれたのか、ほんとに役に立てたの

かは分からないけど、今回のボランティアに参加して本当によかったです。

ありがとうございました。

「不自然」な景色

今回のボランティアの内容は、津波で流されてきたゴミなどを畑から手作業で取り除くといった作業でした。作業を続けていると、割れた瓦やガラスなど様々なゴミが出てきて、本当に津波がすべてを持っていったのだなと実感しました。死んだ鶏や魚が出てくることもあったそうです。

1軒分の畑を約40人で作業しても、1日では終わらない量でした。たった1軒分の畑なのに、相当な人数と時間がかかるんだなと思い、それと同時に、被災地の復興には明らかに人数と時間が足りないということを実感しました。

海から約2キロも離れているのに、周囲には津波の爪跡がまだ残っていて怖くなりました。なぎ倒されたフェンスがそのままになっていたり、周辺の壁に残った見上げるほどの高さの茶色い線で津波がどこまで上がってきたかがわかりました。海から2キロも離れ

ているのにあんな高さの津波が来たら、もうどこにも逃げようがないなと思います。

作業が終わって、より被害が大きかった地域をバスで走ってもらいましたが、4ヶ月前にテレビで見た風景とそんなに変わらないところもあって驚きました。がれきは片付けてありましたが、ただ数箇所固めてあるだけで、そのあと行き場が無いように感じました。

家の1階部分はほぼ全滅で、生活感はまだ無く、かろうじて建っているだけの家ばかりでした。家の土台だけしか残っていないところもたくさんあり、語弊があるかもしれませんが全体的に景色が「不自然」でした。

被災地に行くまで、まだまだ完全復興には程遠いということは分かっているつもりでしたが、まったく理解していませんでした。4ヶ月経った今では、テレビや新聞では復興に向けた取り組みや、ポジティブな情報しか見ていなかったからです。

今もまだ、手が届いていないところがたくさんあるというのをしつかり

覚えておきたいと思います。

3月11日から、被災地の役に立つことを何かしたいと思っていた私にとって、今回のボランティアはとてもいい経験になりました。このような機会を与えてくださってありがとうございます。

受験勉強以上のもの

今回の体験は受験勉強以上のものとなった。震災から5ヵ月たった今でも片付けられていない瓦礫の山や破損し

た家、横転したボロボロの車を実際に目の当たりにすると、新聞やニュースでは伝わらないことまでわかった。自分たちが行ったことは本当に小さなものでしかなかったが、それが被災者のためになると考えると嬉しく思う。他のボランティア参加者や現地の人たちと交流できたり、越北の人とも仲を深めることができたので、このボランティア活動に参加してよかったと改めて感じた。

被災者の声

郡山から埼玉へ

自主避難者の母親 Aさん

私は、福島県郡山市に住んでいた2人のこどもを持つ母親です。

今回名前を伏せて発表させていただくことをお許し下さい。と言いますのは、郡山市はいわゆる避難地域に入っており、そのため、住民の考え方、時には家

族の考え方さえバラバラで自主避難すると言っていると、「大げさなのではないか」とか「お宅は金があるから」とか、いろいろな非難をされることもあり、また支援を求めようにも、「勝手に逃げたのに図々しい」と言う声もあり、そのためこのよ

うな形をとらせていただきました。

当初、いわゆる中通り地方は安全だと言われ続け、現在も避難区域には入っておりません。しかしながら、SPED Iの結果やガイガーカウンターの数値は明らかに汚染が広がっていることを示しています。学校の校庭等はだいたい除染が進んでいる様ですが、各家庭の庭や屋根瓦にたまった放射性物質からは決して低い放射線が出続けています。その結果、子ども部屋で高い数値が見られるという様な恐ろしい事態になっています。

そのため、避難をしたい母子が多数いるのですが、街は普段通り動いており、父親のみが残って仕事をするというパターンが多く見られます。

しかし、自治体によっては制限を設けるところも多く、私どもも父親が会いに来やすい関東圏を選んだものの、避難区域外ということで空いていても公営住宅等に申込みはできず、支援も情報もなく、家賃、初期費用などすべて自分で払いました。現在も家のローンは残っており、また、自宅の修理もせねばならず、その負担はかなり重くのしかかっています。

す。そういったことが多くの子どもたちの避難を阻んでおり、経済力で子どもが安全が左右されるような事態がおこっています。私たちも、実は避難する際、子どもにいただいたお祝い金や友人・親戚からのお見舞い金を集め、ようやく逃げることでできた状態でした。事故の収束は、まだまだ先が見えませんが、ましてや除染が終わる、子どもたちが安心して暮らせるのはいつのことかわかりません。その時まで、この二重生活を続けられるのか不安で眠れないことやイライラから子どもにあたってしまうこともあります。

幸い、ここ埼玉でも7月12日に決定した住宅支援事業のおかげで、いわゆる自主避難者にもようやく支援の手が差しのべられるようになりました。(アパートなどの借上げ等)しかしその情報が各避難者に届くことはなかなかなく、私も電話相談で知り合った司法書士さんに情報をいただいて初めてそのことを知った状態です。そして、こういったことは自ら行政機関に届けなければならぬので、情報を知っているかどうかの差で、知らない人には支援が届かない状態になって

います。(実際、お金を使い果たし、福島に帰った自主避難者も多くいます。)県のホームページからもこの情報にたどりつくのは正直なところ、とても面倒で、なかなかたどりつけませんでした。まして福島に残った方々がこういったことを知り得るのはとても困難だろうと思われ、実際、自主避難も受け入れている自治体(北海道、山形、新潟)などには希望者が集中し、公営があたるのを待っているような状態です。そういった間にもどんどん子どもの被曝が進んでいきます。

どうか自主避難を希望するすべての人々に情報が届き、安心して子どもが暮らせる日が来るのを希望して病みません。最後に埼玉県でもようやく自主避難者に救いの手が差しのべられ始めました。(今のところ、一年間という不安も少しありますが...)今まで多くの方の働きかけや努力があったであろうことと思われまします。この場をお借りしてお礼を申し上げます。(2011

7/20)